



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	札幌農学校第23期生川嶋一郎の学生生活：学業・遠友夜学校・ロシア文学
Author(s)	山本, 美穂子
Citation	北海道大学大学文書館年報, 5, 1-26
Issue Date	2010-03-19
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/43386
Type	departmental bulletin paper
File Information	5_1-26.pdf



< 論 文 >

札幌農学校第23期生川嶋一郎の学生生活

—— 学業・遠友夜学校・ロシア文学 ——

山本 美穂子

はじめに

本稿の目的は、「川嶋一郎日記」〈①「明治三十六年当用日記」（1903年）、②「明治三十七年当用日記」（1904年）、③「東北遊記」（1902年7月）、④「北海紀行」（1904年8月）〉を主要な資料として、20世紀初頭の札幌農学校生の学生生活を描出することにある。

川嶋一郎は1880年岩手県二戸郡福岡町に生まれ、1900年7月札幌農学校予修科に入学した。当時、札幌農学校の教官は佐藤昌介（1期生）、南鷹次郎（2期生）、宮部金吾（2期生）、橋本左五郎（8期生）、大島金太郎（11期生）等の農学校卒業生が中心となって専門教育を教授していた。また、本科4年級には独自の文化活動を展開していた有島武郎、森本厚吉、半澤洵等の19期生がいた。川嶋一郎はこうした学的环境の中で、1902年9月本科に進学し、農学乙科（畜産学）を専攻、1906年7月に23期生として卒業した。

川嶋一郎は、札幌農学校本科1～3年級在学中の1903～04年、2年間にわたり学生生活を「当用日記」に書き綴った。「当用日記」からは、札幌農学校での学業、寄宿舎での生活、北8条キャンパス移転に伴う学生自炊共同生活の様子のほか、大学昇格運動中における実業学校令改正への反発、予修科生徒同盟停学問題や文武会脱退騒動など、学生生徒の動揺も知ることができる。また、遠友夜学校での教師活動や生徒が学ぶ姿、教師仲間の足助素一や逢坂信吾等との交友も記している。さらに、読書を通して徳富蘆花・トルストイ等から受けた思想的影響、一高生藤村操自殺の『萬朝報』記事の衝撃も窺える。「東北遊記」は1902年7月青森・秋田旅行の、「北海紀行」は1904年8月道東旅行の行程・見聞・各地のスケッチを記した紀行日誌である。

札幌農学校生による学生日記は、「川嶋一郎日記」以外では、志賀重昂（4期生）、有島武郎（19期生）、足助素一（森林科1904年卒）による日記が翻刻・刊行されてはいるが、極めて数が少ない¹⁾。また、「川嶋一郎日記」をはじめで紹介した松澤弘陽「札幌農学校・トルストイ・日露戦争——一学生の日記と回想——」²⁾は、思想史研究の視点から、日露戦争に対する札幌農学校当局と学生の態度に関する日記記述を抜粋し、「北海道という遠隔地」の学生のトルストイ受容の様相を指摘した³⁾。しかしながら、「川嶋一郎日記」を用いた先行研究はこの一例があるのみである。

筆者は「川嶋一郎日記」のすべての翻刻⁴⁾を通じて、「川嶋一郎日記」の記述の大部は、

①札幌農学校での学業（講義・試験・実習・演習）、②遠友夜学校での教師活動、③読書（とりわけ、ロシア文学）で占められていることを確認した。20世紀初頭の札幌農学校で、一学生が起床から就寝まで、どのような時間の過ごし方をしていたのかを、この3項目が物語っているといっても過言ではない。「川嶋一郎日記」は、大学史研究においては重要視されながら必ずしも十分とはいえない難かった学生生徒の学業史、とりわけ日常生活をとらまえるという課題を大きく前進させる資料である。したがって、本稿では、①学業、②遠友夜学校、③ロシア文学について日記内容を分析し、川嶋一郎の学生生活の実態と背景を明かにすることとする。

1. 札幌農学校における学業生活

岩手県二戸郡福岡町の名家である川嶋家の長男 川嶋一郎は、1894年福岡小学校高等科を卒業後、仙台遊学（日進学舎、仙台数学院）を経て上京、1896年9月開校間もない早稲田中学校に入学、1898年4月には進学校の私立中学郁文館に転校して1900年3月卒業した⁵⁾。

当時、岩手県下では盛岡尋常中学校しかなかったが、1891年上野～青森間鉄道開通（当時、上り26時間40分）に伴って福岡停車場が開業した好機もあり⁶⁾、川嶋家の青年達はこぞって東京へ進学した。5歳年上の叔父の川嶋明八は1893年私立中学郁文館卒業後、1898年第二高等学校（仙台）を経て東京帝国大学農科大学に進学し、さらに、同年齢の叔父の末蔵は陸軍士官学校進学志望のため1896年成城中学校に、実弟の直次は1900年日本中学校に進学している⁷⁾。

東京での遊学中、川嶋一郎は本郷3丁目辺で購入した札幌農学校学藝会『札幌農学校』（1898年）に感銘を受け⁸⁾、1900年6月11日札幌農学校に予修科入学願書を提出した。川嶋一郎旧蔵『札幌農学校』の中扉には「本書ハ私ニ札幌農学校入学ノ決心ヲ為サシメシ紀念ノ書冊テアル 一郎誌」と書き込まれている。

当時、札幌農学校は1896年廃止された予科の代わりに、予修科（修業年限2年、入学資格は尋常中学校卒業生）を1898年新設していた。これにより、尋常中学校→予修科（2年）→本科（4年）の課程を経た札幌農学校卒業生〔学士〕は、尋常中学校→高等学校（3年）→帝国大学（3年）の課程を経た者〔学士〕と卒業年齢が同一となり札幌農学校の大学昇格機運が高まった。道内では中学校設置は2校（札幌・函館）にとどまっていたが、全国的には中学校数の増加と共に高等学校入学が狭き門となっていたこともあり、予修科入学者募集には全国各地の中学校から受験生が集まるようになっていた⁹⁾。

第3回予修科入学試験（1900年）は83人もの受験生があり、国語漢文（訓点解約作文）、数学（算術代数幾何（平面立体）、三角術初歩）、英語（和文英訳、英文和訳）の3科目を札幌（演武場）・東京（文部省内）で実施した。川嶋一郎は7月9日演武場で受験し、17日付けで合格した（合格者数40/定員40）¹⁰⁾。この年、道外中学校出身者は32人を占め、沖

縄県から初の入学者もあり、東京遊学経験者は16人と多彩な顔ぶれが参集した（表1）。川嶋一郎はこれらの同級生等と共に人文科学系基礎科目を予修科で履修し（表2）、1902年7月予修科を修了した。現存する「川嶋一郎日記」は、この直後から綴られた。

本章では、1902年9月専門課程である本科に進学した川嶋一郎の学業について、「川嶋一郎日記」をたどりながら、（1）本科講義、（2）農業実習、（3）実科演習を考察することとする。

表1 予修科入学者出身校一覧（1900年）

地域	出身中学校名	人数	計	備考 (都内通学経験校、内数)
北海道	札幌中学校	8	8	東京数学院・国民英学会1、 私立中学都文館1
東北	東奥義塾	1	7	
	青森第二中学校	1		
	盛岡中学校	1		
	米澤中学校	1		
	庄内中学校	1		
	新潟中学校	1		
	北蒲原中学校	1		
関東	麻布中学校	1	15	
	私立中学都文館	3		早稲田中学校1
	日本中学校	1		正則英語学校1
	神田中学校	1		
	順天中学校	2		国民英学会・正則英語学校1
	大成中学校	1		
	正則中学校	2		
	成城中学校	1		
	学習院	1		
	埼玉和英学校	1		東京数学院1
	埼玉県第一中学校	1		
中部	松本中学校	2	2	
近畿	同志社中学校	1	3	
	大阪府第五中学校	1		
	和歌山県第一中学校	1		
四国	丸亀中学校	1	2	
	高松中学校	1		
九州	福岡県中学修猷館	1	2	
	大分中学校	1		
沖縄	沖縄県中学校	1	1	正則英語学校1
	合計	40	40	

備考 札幌農学校簿書729-3「予修科入学願書 明治三十三年七月教務部」より作成。

表2 札幌農学校第23期生予修科履修表

学年・学期	教科目	学年・学期	教科目
1年級 1学期 1900.7-12	英語	2年級 1学期 1901.9-12	測量
	数学		動物学
	漢文		植物学
	化学		地質学
	物理学		物理学
	歴史		化学
1年級 2学期 1901.1-3	独逸語	2年級 2学期 1902.1-3	兵式体操
	図画		漢文
	漢文		英語
	英語		独逸語
	独逸語		数学
	数学		測量
1年級 3学期 1901.4-7	物理学	2年級 3学期 1902.4-7	動物学
	化学		植物学
	近世史		地質学
	図画		物理学
	兵式体操		化学
			兵式体操
2年級 1学期 1901.9-12	漢文		漢文
	英語		英語
	独逸語		独逸語
	数学		数学

備考 『札幌農学校一覧』、札幌農学校成績表より作成。

1-1. 本科講義

川嶋一郎が本科に進学した1902年当時、学生数は本科69人（4学年、定員40）、生徒数は予修科84人（2学年、定員40）、土木工学科54人・森林科45人・農芸科84人（3学年、定員30）であり、336人の学生生徒が在学していた。

川嶋一郎が本科在学中の1902～06年は、1902年清国人留学生1名の農芸科入学を契機

に、清国、朝鮮、インドからの留学生が相次いだ時期でもあり、川嶋一郎は留学生と寄宿舎生活も共にしている。その一方で、教官には開学当時のような専属の外国人教師はおらず、専任教官（1902年教授13、助教授10）はすべて日本人であった。教授には主に札幌農学校1～3期生、助教授にはその教え子である中期・後期の卒業生が就いていた（表3）。本科の主要な専門科目を担当した教官は、札幌農学校出身者が7割を占めていた。

表3 札幌農学校教官（1903年5月1日現在）

課目	教授	助教授
農業経済学	佐藤昌介(1)	高岡熊雄(13) 伊藤清蔵(18)
農学	南鷹次郎(2) 尾泉良太郎(3)	時任一彦(15) 田中芳四郎 星野勇三(19) 鈴木武良 東海林力蔵(19) 石川金平
植物病理学	宮部金吾(2)	半澤洵(19)
農芸化学	吉井豊造 大島金太郎(11)	
畜産学	橋本左五郎(8)	長嶺林三郎(18) 上田半二郎(農伝1)
昆虫学	松村松年(13)	須田金之助(16)
動物学	原十太	村田莊次郎
森林学	新島善直	
土木工学	坂岡末太郎(工4) 穴戸乙熊 古藤猛哉 高山節繁	

備考 『職員録 明治三十六年』（印刷局）、『札幌農学校一覧』より作成。（ ）内数字は札幌農学校卒業期を、工は工学科、農伝は農芸伝習科、無記は農学科を指す。

当時、札幌農学校は週6日（月～土曜日）授業があり、本科生は、①講義を午前毎に毎3～4時限（60分/時限）、②農業実習（1～2年級）・実科演習（3～4年級）を午後毎に毎1～2時限に時間割編成していた。川嶋一郎ら23期生が本科で履修した科目は表4のとおりである。

23期生の履修科目は、1899年佐藤昌介校長のもとで改訂したカリキュラムがベースとなっており、従前に比べて、畜産学関連科目の履修が最大時間数となっているのが特徴的である（表5）。

1895年4月札幌農学校が文部省直轄学校となり、佐藤昌介校長は、札幌農学校出身者における文部省在外留学生第1号として、橋本左五郎助教授（8期生）を選び、「牧畜及畜産製造学」研究のため満3年間ドイツ留学を文部省に交渉した¹¹⁾。橋本助教授は同年5月7日辞令がおり¹²⁾、1900年6月まで実際には6年間の長期にわたりドイツを中心に研鑽してきた。札幌農学校では、橋本助教授の帰国にあわせ、1899年カリキュラムを改訂し、畜産学関連科目を重点化したのである。

橋本左五郎教授担当の「畜産学」が開講したのは1900年9月始業学期であった。本科4年級在学の19期生が受講した。それ以前は、1894年1月（12期生；4年級後期）～1900年7月（18期生；本科4年級3学期）にかけて、園芸学専門の南鷹次郎教授が、参考文献にアメリカの文献をあげて「牧畜論」を教えていたが¹³⁾、1900年9月「畜産学」開講により

表 4 札幌農学校第23期生本科履修表

学年・学期	教科目	担当教官	学年・学期	教科目	担当教官
1 年級 1 学期 (1902.9-12)	農学総論	[南鷹次郎]	2 年級 3 学期 (1904.4-6)	経済原論	佐藤昌介
	有機化学	[吉井豊造]		農史	佐藤昌介
	植物組織学	宮部金吾		農業実習	南鷹次郎等
	動物学	原十太	3 年級 1 学期 (1904.9-12)	普通作物論	南鷹次郎
	英文学	[高杉栄次郎]		肥料論	吉井豊造
	独逸語	[橋本左五郎]		園芸論	南鷹次郎
	農業実習	[南鷹次郎等]		植物病理学	宮部金吾
1 年級 2 学期 (1903.1-3)	農具論	尾泉良太郎		家畜生理学	橋本左五郎
	隠花植物学	宮部金吾		昆虫学	松村松年
	動物学	原十太		細菌学	橋本左五郎
	英文学	高杉栄次郎		農業経済学	佐藤昌介
	独逸語	橋本左五郎		殖民論	高岡熊雄
	農業実習	[尾泉良太郎]	3 年級 2 学期 (1905.1-3)	特用作物論	南鷹次郎
1 年級 3 学期 (1903.4-6)	分析化学	吉井豊造		畜産学	橋本左五郎
	植物營養論	大島金太郎		家畜生理学及衛生学	橋本左五郎
	農具論	尾泉良太郎		家畜飼養論	大島金太郎
	隠花植物学	宮部金吾		養蚕学	須田金之助
	動物学	原十太		農業経済学	佐藤昌介
	英文学	大島金太郎		森林学	新島善直
	独逸語	橋本左五郎	3 年級 3 学期 (1905.4-7)	園芸論	南鷹次郎
	農業実習	尾泉良太郎等		畜産学	橋本左五郎
2 年級 1 学期 (1903.9-12)	土地改良論	尾泉良太郎		家畜飼養論	大島金太郎
	土壤論	吉井豊造		農業経済学	佐藤昌介
	隠花植物学	宮部金吾		殖民論	高岡熊雄
	植物營養論	大島金太郎		森林学大意	新島善直
	動物発生学	原十太		水産学大意	佐藤昌介
	昆虫学	松村松年	4 年級 1 学期 (1905.9-12)	畜産学	橋本左五郎
	経済学	佐藤昌介		獣医学大意	南鷹次郎
	農業実習	南鷹次郎等		農産製造論	吉井豊造
2 年級 2 学期 (1904.1-3)	普通作物論	南鷹次郎		農政学	高岡熊雄
	肥料論	吉井豊造	4 年級 2 学期 (1906.1-3)	畜産学	橋本左五郎
	土地改良論	尾泉良太郎		獣医学	南鷹次郎
	植物生理学	宮部金吾		農産製造論	吉井豊造
	植物營養論	大島金太郎		農政学	高岡熊雄
	経済原論	佐藤昌介	4 年級 3 学期 (1906.4-7)	畜産学	橋本左五郎
	昆虫学	松村松年		農政学	高岡熊雄
2 年級 3 学期 (1904.4-6)	動物学	原十太	備考 『北海道大学大学文書館年報』第 4 号(2009 年 3 月、 154～155 頁)を加筆訂正。[] は推定。		
	昆虫学	松村松年			

表5 カリキュラム上の「畜産学」関係科目時間数 (1894～1907年)

年	学課目	科目名	本科学年	学期	毎週時間数
1894-1895	農学	牧畜論	4年級	前期、後期	5
	化学	動物飼養論	3年級	前期	3
1895-1899	農学	牧畜論	4年級	1,2,3学期	5
	化学	動物飼養論	3年級	1学期	4
1899-1907	畜産学	畜産学	3年級	2学期	3
			3年級	3学期	5
			4年級	1,2,3学期	5
		家畜生理学及衛生学	3年級	1,2学期	3
		家畜飼養論	3年級	2,3学期	3
		細菌学	3年級	1学期	3

備考 『札幌農学校一覽』より作成。なお、細菌学は1899-1900年に随意科目であったが、1900-1907年には必修科目となった。

「牧畜論」は消えることとなった。

次学期 (1901年1～3月) には、家畜・畜産製造物の衛生に関する「家畜生理学及衛生学」、「細菌学」が開講した。これらの3科目は橋本教授がドイツの文献をもとに、用語もドイツ語に一新して指導をはじめたものである (表6)。さらに、「畜産学」は、19期生では3学期分であったが、20～22期生では4学期分に増え、23期生では5学期分と最大時間数となった。川嶋一郎の受講ノートの内容・分量からも、本科3～4年級の大部分が橋本教授の畜産学関連授業に集中していたことがうかがえる。

表6 橋本左五郎講義「畜産学」の内容構成 (1905～06年)

文献 Literatur
家畜 Haustier
外的影響 (気候)
遺伝論 Die Vererbung
育種方法 Die Züchtungs Methode
家畜審査 Die Beurteilung der Tier
各論 ①～⑥
①馬の飼養 Pferd Zucht
②家禽の飼養 Geflugel Zucht (鶏、家鴨、鶯鳥)
③牛の飼養 Rinder Zucht (水牛、野牛、半野牛、牛)
④豚の飼養 Schweine Zucht
⑤綿羊の飼養 Schaf Zucht
⑥山羊の飼養 Ziegen Zucht

備考 川嶋一郎「畜産汎論 Allgemeine Tierzuchtlehre」(受講ノート No.00234、大学文書館蔵)より作成。

また、日清戦争後に普及した市乳 (市販の飲用牛乳) の販売において、1900年4月牛乳営業取締規則 (内務省令第15号) により、牛乳・乳製品 (煉乳、粉乳) の衛生取締と、比

重・成分についての規制・取締（不純物混入、細菌感染品の取り締まり）が始まった。札幌市街でも、1890年宇都宮牧場をはじめとして搾乳・牛乳販売業者が増え、脚気治療・滋養強壮のための牛乳飲用が普及していたところに¹⁴⁾、取締規則で生乳殺菌法が問題となった。帰国したばかりの橋本左五郎教授は、早速、前田農場（札幌郡手稲村、篠路村）の要請を受けて生乳殺菌法を改良し、以後、殺菌乳証明書の発行を行なうなど活躍した¹⁵⁾。加えて、札幌農学校は1902年1月「札幌農学校臨時部歳出予算」に「畜産学科」の本科への増設を掲げて計上し¹⁶⁾、同年6月には北海道畜産協会が発会、佐藤昌介校長が会長に、南鷹次郎教授・橋本左五郎教授が幹事に就任した。川嶋一郎が本科在学中は札幌農学校が全学をあげて畜産学重視へと動いていたのである。

1－2．農業実習

川嶋一郎は、「当用日記」において、本科1～2年級では授業中に行なった各種実験と「農業実習」を、3年級では「実科演習」について具体的に何を行なったのか、頻繁に記した。特に記述が多いのは、農業実習であった（表7）。

表7 本科における農業実習内容（1903.1～1904.7）

学期	実習	内容
1903.1-3月 (1年級2学期)	農具実習	農具の分解・組立 1. 犁：プラウ (plough)、ソルキプラウ (Sulky plough) 2. 草刈機：モアー (mower) 3. 耕作機：コンカルツベーター (cultivator)
1903.4-6月 (1年級3学期)	園芸学実習	蔬菜栽培（碎土・区画・播種・肥料・除草・培土） 1. 碎土機：ハーロ (harrow) 2. とうもろこし、キャベツ、馬鈴薯、大豆 水稻栽培（碎土・田植）
1903.9-12月 (2年級1学期)	園芸学実習	蔬菜収穫 稲刈・稲こき
	果樹栽培実習	苗木掘取
	農産製造実習	林檎ジャム、トマトソース、林檎ゼリー、パンの製法
1904.1-3月 (2年級2学期)	農産製造実習	楓糖の製法
	畜産製造実習	粉乳、チーズ、ハム、ソーセージの製法
1904.4-6月 (2年級3学期)	果樹栽培実習	挿木・枝切り・つぎ木（グズベリー、林檎、葡萄） 石油乳剤（害虫駆除剤）の製法
	園芸学実習	蔬菜栽培（碎土・区画・播種・肥料・除草・培土） 1. プラウ (plough)、ハーロ (harrow) 2. 馬鈴薯、蕎麦、小麦、大麦、とうもろこし、大豆、小豆、菜豆、白菜、大根、蕪、胡瓜
1904.9-12月 (3年級1学期)	—	蔬菜収穫

備考 川嶋一郎「当用日記」（1903年、1904年）より作成。

1904年4月、札幌農学校では「第一農場経営及実習上ニ於テ制定ノ必要アリ」との理由

で、「第一農場事業規程」を制定、5月1日より施行した。これにより、第一農場には実習係（学生生徒実習担当）など9係が配置されており（表8）、川嶋ら23期生は実習体勢が完備された中で実習にのぞんでいた。

表8 農場実習担当表（1904年）

担当	教官
第一農場実習係主任	尾泉良太郎
第一農場学生実習係分任、馬具製作分任	石川金平
第一農場学生実習係分任、馬匹及耕牛分任、病畜係主任	上田半二郎
第一農場生徒実習係、養蚕係主任	須田金之助
第一農場生徒実習係、農芸科蔬菜園分任、製造係主任	田中芳四郎
第一農場生徒実習係、園芸係主任、製麻分任、事務係主任	鈴木武良
第一農場生徒実習係、畜産係主任	長嶺林三郎
第一農場生徒実習係、試作係主任	東海林力蔵

備考 札幌農学校簿書986より作成。

本科生に課された農業実習は、①農具実習、②園芸学実習（蔬菜、水稻、果樹）、③農産製造実習、④畜産製造実習であった。1年級（冬期）で西洋農具の使用法を学んだ後、1～2年級（春～秋期）にかけて、農具を利用して蔬菜、水稻の試験栽培・収穫を行なった。収穫した農作物は、学生数人が集まっては“収穫祭”と称して調理し、農場から払い下げた牛乳を飲みながら食している。大根の漬け物も作って食べていた。また、2年級（秋・冬期）には、農作物や畜産（生乳・肉類）の加工製造法も実習として行なっている。農産・畜産製造物は、初めて食すものがほとんどで、川嶋一郎はソーセージについて「初めて味ふ。いと甘し」と感嘆の声をあげている（1904年2月24日の条）。

また、水稻栽培実習については、農場管理者・施策者を期待された本科生徒と、農業現業者を期待された農芸科生徒とには、規模・方法・目的に大きな違いがあった。本科生による実習報文（札幌農学校簿書803、1904年度実施）によると、本科2年級は6人1組で（1）苗代での苗仕立て、（2）本田（30坪）栽培試験を実施している。試験項目は、土性・肥料・整地（鋤、ハローにて耕地）・区画・生育・管理（雑草刈り）、病害（イモチ病）・虫害（浮塵子^{ウンカ}）の対策、収穫等である。一方、農芸科生徒の実習は、農芸科生徒による実習報文「水稻栽培試験報文」（札幌農学校簿書808）によると、馬2頭引きのプラウを用いた大規模なもので、試験項目も多く、「収支計算」を綿密に行なって経営的栽培を目指した実習であった。

1－3. 実科演習（農学乙科）

本科2年級を終えた川嶋一郎は、1904年6月30日、農学乙科への実科専攻願を提出した（表9）。農学乙科は、1896年9月「実科規程」¹⁷⁾により新設された、本科3～4年級を対

象にしたゼミナールのひとつで、農学乙科の課目は、演習（畜産製造、家畜解剖学及生理学、家畜衛生学、蹄鉄学、病論大意）と実習（畜舎、農場）であった。1904年10月には「学生生徒乗馬実習規程」により週2回乗馬実習も課されている。農学乙科の指導教官は、13～18期生は南鷹次郎教授、19期生以降は橋本左五郎教授であった。

表9 23期生における実科専攻（21人、1904年）

実科	人数（学生名）
農学甲科	5人（安部忠一、橋本健三郎、藤井為次郎、大関雄只、竹田茂）
農学乙科	3人（川嶋一郎、柳川鑑蔵、江刺家昂）
農業経済学	6人（安東多加喜、色部米作、狩野時二、河野孝太、逢坂信吾、大竹温孝）
植物病理学	3人（宮城鐵夫、鈴木力治、末光績）
農芸化学	3人（大光寺毅夫、関司、高橋孝治）
農用動物学	1人（素木得一）

備考 札幌農学校簿書996より作成。

川嶋一郎が農学乙科を選択した動機は明かではないが¹⁸⁾、「当用日記」をみると、1903年1月～2月にかけて川嶋一郎は『畜産汎論』（高見長恒著、博文館、1900年）を読んでおり、本科1年級からすでに牧畜・畜産に興味を抱いていたことがうかがえる。

2年級に進級した後も、川嶋一郎は、1903年9月には先輩の石澤達夫（北海道庁殖民部拓殖課嘱託、19期生）を青年寄宿舎に訪ねて牧畜業談を求めている。石澤達夫は、橋本左五郎教授のもとで畜産学を専攻し、エンシレージ（発酵飼料）¹⁹⁾の乳汁における効能を実証的に調査し、卒業後は自ら青年寄宿舎裏庭で綿羊を飼って飼養管理法を実験し、道庁では家畜飼料・家畜飼養管理法の改善策を練ると共に道内外の牧畜現況を調査して『殖民公報』編纂にも携わり、北海道畜産協会の機関誌『北海道畜産協会会報』（1903年6月初刊）²⁰⁾においても牧畜業推進・改善を論じて活躍していた²¹⁾。さらに、川嶋一郎にとって石澤達夫は、岩手県出身という同郷の身近な先輩であり、弼水倶楽部（札幌農学校内における岩手県人会）を1903年11月再興した尊敬する先輩でもあった。石澤達夫は、川嶋一郎にとって、牧畜・畜産業の現況・指導をあおぐには最適な先輩であった。

その後も、川嶋一郎は、1903年11月28日農友会海外視察談会に赴いて槇鍛「米国畜産業観」を聴き²²⁾、12月24日に再び石澤達夫に牧畜業談を求めるなど、牧畜・畜産への関心を深めていることが「当用日記」からうかがえる。翌年5月18日には、夏期休暇中に道内牧場で実習する計画を石澤に相談しており、農学乙科専攻の決意をかためていた。6月13日には石澤に上川地方の牧場斡旋を依頼、6月14日には畜産共進会を見学し、特に牛（肉用牛：デボン Devon、乳用牛：エアシャー Ayrshire、ホルスタイン Holstein、肉・乳用牛：短角 Shorthorn）に関心を寄せている。7月下旬からは石澤が斡旋した旭農場（上川郡）²³⁾で約1カ月乳牛飼養法・搾乳練習等を実習し、帰路は搾乳業が大規模な藤野牧場（上川郡）²⁴⁾、山縣牧場（根室郡）²⁵⁾を見学して帰札した。

1904年9月、川嶋一郎は同級生2名（柳川鑑蔵、江刺家昂）とともに農学乙科に進み、夜には『牛乳ト衛生』（石橋三郎治著、裳華房、1900年）を読み始めた（1904年9月12日の条）。当時、農学乙科の上級生には米山豊、湯地定武がいた。彼等も1904年夏期休暇には実習をしており、米山豊は藤野牧場の現況調査を、湯地定武は北海道庁真駒内種畜場で牛馬飼養管理、搾乳・牛酪製造の実習後、宇都宮牧場（札幌郡白石村）、旭農場等の道内牧場について現況調査をしていた²⁶⁾。川嶋一郎、米山豊、湯地定武に共通する視点は、乳牛飼養・管理法と乳製品製造法の現況調査であった。22～23期生の調査方法は、農業経済学的指標（地勢、沿革、資本金、経費統計）を用いた牧場経営・管理法と蕃殖法の視点で見学・現況調査を行っていた南鷹次郎教授指導の学生たちとは差異があった²⁷⁾。

表10 農学乙科演習内容（1904～05年）

乳汁の顕微鏡観察 乳球（milch Kugelehen）、初乳球（Kolostrum）、脂肪
脂肪検定器の使用法 （マルシャン、ゲルベル乳脂計）
乳汁の分析 1. 水分 Wasser 2. 乳脂肪 Mich Fette（乳油及び脂油） 3. 乳汁タンパク質 Lactoprotein（Kasein 乾酪素：カゼイン、Albumin アルブミン） 4. 乳糖 Milch Zucker 5. 無機物 Asche
飼料の分析 （乾燥飼料中の水分、asche 無機物、fette 脂肪、protein タンパク質、clude fiber 粗繊維など）
牛酪（加塩牛酪、無塩牛酪）分析法
肥料分析 1. 窒素定量法（有機形態、アンモニア形態、硝酸形態のNの分析） 2. リン酸定量
乳油の検査（溶解点、凝固点） （牛酪の油分、牛油、山羊乳油、羊、水牛、豚、人）
搾乳法

備考 川嶋一郎「当用日記」（1904年）、川嶋一郎「畜産実験演習帳 廿七八年 畜産学実験ニ於テ」より作成。

川嶋一郎が橋本左五郎教授から指導された農学乙科演習は、①乳汁、②乳製品、③飼料、④肥料の定量分析を中心に行なっており（表10）、酪農業の普及・改善を目指したものであった。

また、橋本左五郎教授は、この時期、「酪農論」も教えており²⁸⁾、欧州の酪農業・市場現況をふまえて、乳汁の細菌（乳牛の病因、乳製品製造に必要なバクテリア等）・殺菌法のほか、牛酪（バター）を中心とした乳製品製法を詳しく教えた（表11）。

そのため、22～23期生の多くは、牛酪、煉乳の品質改善を課題として化学分析に取り組み、卒業論文にまとめている（表12）。川嶋一郎も4年級進級直後（1905年9月）には、「牛酪製造に最適當なる乳皮（Cream）の酸度に就て」を卒論題目としていた²⁹⁾。その後、橋

本左五郎教授から「氷乳」研究の指示があり³⁰⁾、川嶋は、生乳の長期保存・遠隔地輸送方法としてデンマークで1894年発明された「氷乳」（低温殺菌後、製氷器で氷結させた牛乳）について連日実験を行ない、卒業論文にまとめた。「氷乳」も牛酪、煉乳と同様に余剰乳の利用法のひとつであり、生乳利用の活路を示して酪農業を推奨するための研究であった。

表11 橋本左五郎講義「酪農論」（1904～06年頃）

1. 乳ノ定義 Definition of Milch
2. 乳 Milch
(1) 乳の成分 Composition of Milch ①水分 Wasser、②脂質 Fette、③タンパク質 Eiweiss Stoffe [Kasein カゼイン、Albumin アルブミン、Lactprate ラクトパタ]、④乳糖 Milch Zucker、⑤無機物 Mineral Matter
(2) 乳の形成 Die Bildung der Milch
(3) 初乳 Das Kolostrum
(4) 乳量及ヒ乳成分ニ影響ヲ及ホス条項 ①品種、②授乳期間、③家畜ノ年齢、④発情期、⑤犢牛ヲ母牛アリ分離スルコト、⑥乳牛ノ運動及ヒ労働、⑦温度、⑧飼料、⑨搾乳法、⑩休憩
(5) 搾乳法 Meklen
(6) 諸動物ノ乳汁
3. 乳汁ノ細菌 (バクテリアの類別、結核 Tuberculosis、ジフテリア Diphtheria、チフス Typhus、コレラ Cholera 等)
4. 乳汁ノ殺菌 (低温殺菌 pasteurisieren、高温殺菌 sterilisation)
5. 乳ノ経営 Verwaltung der Milch
(1) 生乳 (取扱舎、冷却法・冷却器、運搬法、牛乳管理、脂肪検定器、比重計)
(2) 氷乳 Die Eismilch
(3) 牛酪 Butter (附 人工牛酪) (製酪方法・材料、温度・酸トノ関係、製酪時間、初乳ヨリ製スル方法、製酪器械ノ選択、色、食塩ノ用量・種類、加塩ノ目的、圧縮方法、梱包方法、牛酪ノ種類、収益・産出高、成分)
(4) 乾酪 Käse/Cheese
(5) 煉乳 Kondensierte Milch/Condence Milch
(6) 乳汁ヨリ製シタル飲料
(7) 脱脂乳ノ利用法
(8) 粉乳 Milch Pulver

備考 川嶋一郎「橋本教授口述 酪農論 Milchwirtschaft」(受講ノートNo00234、大学文書館蔵)より作成。

表12 農学乙科卒業論文（22～23期生、1905～06年）

学生名	卒論題目	提出年	期
米山 豊	煉乳調度ニ就テ	1905	22
湯地 定武	煉乳中ノ結晶ニ就テ	1905	22
川嶋 一郎	氷乳ノ状態ニ就テ	1906	23
柳川 鑑蔵	煉乳ノ成分	1906	23
江刺家 昂	不洗及水洗牛酪ノ品質及貯蔵力ノ差異	1906	23

備考 卒業論文は北海道大学農学部図書室蔵。

2. 遠友夜学校への参画

2-1. 遠友夜学校教師をつとめた札幌農学校生

遠友夜学校は、1894年、札幌農学校教授新渡戸稲造（2期生）が、札幌区南4条東4丁目2番地に、貧窮する家庭の児童や晩学者に普通教育を施すために、札幌独立基督教会附属日曜学校「豊平日曜学校」（1890年設置）跡を引き受けて開校した夜学校である。開校当初は週2回（毎1時間）、普通学のほか看護、裁縫なども教え、1897年尋常科・高等科を設けて毎夜2時間ずつ授業を行ない、1899年第1回卒業生を送り出した³¹⁾。1897年新渡戸稲造の離任後は、札幌農学校助教授宮部金吾（2期生）が同校代表を継ぎ、その後も代表は、大島金太郎（1905～08年）、有島武郎（1909～14年）、蠣崎知二郎（1915～19年）、野中時雄（1919～20年）、小谷武治（1920～21年）、半澤洵（1929～44年）といった札幌農学校・東北帝国大学農科大学卒業者が務めた³²⁾。そして、同校の教師の大部分は札幌農学校の学生生徒であり、川嶋一郎もそのひとりであった（表13）。

表13 遠友夜学校教師を務めた札幌農学校生（1894～1906年在籍者）

所属・卒業学科等	学生生徒名
13期生(1895年卒)	萱場三郎
14期生(1896年卒)	吉澤誠造、大脇正諄
15期生(1897年卒)	藤田昌、小谷武治
17期生(1899年卒)	土肥竹次郎、後藤鐵藏、遠藤万藏
18期生(1900年卒)	吉田碩藏、神田勝亥
19期生(1901年卒)	岩波六郎、森本厚吉、有島武郎、瀧臣弼、半澤洵、蠣崎知二郎、井口為二郎、井街顯、畑治作
22期生(1905年卒)	河内完治、北澤小八郎
23期生(1906年卒)	末光績、竹田茂、川嶋一郎
東北帝国大学農科大学	逢坂信忠・池田競・桑山茂・副島昌・市川清水・澁谷紀三郎（1908年卒）、大久保敬・柳川秀興（1909年卒）、鈴木限三・末光信三（1910年卒）、中村正壽・前川十郎・竹田義治（1911年卒）、早川直瀬（1912年卒）、蓮見道太郎（1913年卒）、加藤茂雄・今井仲二（1914年卒）
農芸科	古田正二（1899年卒）、石川芳三郎（1903年卒）、角館喜一郎・赤松義高（1904年卒）、上田源松（1905年卒）、荒川重理（1906年卒）、倉井小次郎（1907年卒）、曲尾寅男（1909年卒）、武邊良造・曲尾寅男（1906 - 07年在籍）
森林科	足助素一（1904年卒）、川尻仁（1905年在籍）、藤井守藏（1908年卒）、國分謙次郎（1909年卒）
予修科・予科	安藤熙（1907年卒）
本科生	伊藤肇（1894年本科在籍）、池田次郎（1904年予修科卒・1905年本科在籍）、木村莊輔（1904年予修科卒、1904-06年本科・1907-08年大学在籍）
予科生	長橋治作・佐藤信孝（1892年予科在籍）、那須次郎（1889-91年予科在籍）

備考 『遠友夜学校』（1921年頃発行、半澤洵関係資料：大学文書館蔵）、遠友夜学校『事業一覧』（1936年）、『札幌農学校一覧』、『東北帝国大学農科大学一覧』より作成。

川嶋一郎は、本科2年級在学中の1903年1月6日に、先輩の河内完治（本科3年級）から「遠友夜学校の受け持ちを手伝ってくれずや」と依頼を受け、遠友夜学校教師となった。当日夜、早速、新任教師として池田競（本科2年級）と共に紹介された川嶋一郎は、「以後充分なる同情と能ふ丈けの心切と誠実を以て教鞭を取るべきむねを誓」った。1903～04年当時、河内完治、北澤小八郎、末光績、池田競、逢坂信吾、竹田茂、池田次郎（本科学生）、足助素一（森林科生徒）、石川芳三郎、角館喜一郎、赤松義高、上田源松、荒川重理（農芸科生徒）等の札幌農学校生10数名が遠友夜学校教師を務めており、河内完治をリーダーとして、教師の確保・調整、時間割（担当科目・曜日）の作成、生徒の成績・進級の可否など教務全般を行っていたことが「当用日記」からうかがえる。

当時、遠友夜学校では、1900年文部省令第14号小学校令の施行規則に準じて、各科で下記の科目を教えていた³³⁾。

高等科（8科目）：読書、作文、習字、算術、地理、歴史、理科、唱歌

尋常科（5科目）：読書、作文、習字、算術、唱歌

川嶋一郎は、1903年1～12月、尋常科（3年生13人、2年生14人）の作文を受け持ち、火・木・土曜日の週3日を担当した。時には、算術・珠算も教えなければならず、珠算を習得していなかった川嶋は苦勞して教えている³⁴⁾。川嶋は、作文の授業では、3年生には「火事見舞」、「金子を借りる」など主に実用的な題目を与え、2年生には「猫」、「橋」、「川」など日常的な題を与えた（表14）。作文添削、採点は帰宅後に行なっている。1904年は自身の学業に忙しく、当初は受持授業をとらなかった。しかし、2月～3月にかけて、石川芳三郎（農芸科3年級）の代理として、月・水・金曜日の週3日受け持つこととなった。

表14 川嶋一郎が指導した作文題目（1903年）

学年	作文題目
3年生	学校、近火見舞の文、書籍を借りる文、砂糖、火事見舞の文、丸山、金子を借りる文、我国、花を贈る文、祭礼に友を招く文、作文、石炭、大工を頼む文、秋の景色、病気
2年生	時計、川、椿、猫、にわとり、梅、松、すずらん、読書、石油、盲人、鞠草、桃太郎

備考 川嶋一郎「当用日記」（1903年）より作成。

また、この当時、遠友夜学校教師には報酬が支払われていた。川嶋一郎は1903年1月31日、初めて報酬を河内完治から受け取っている。「夜は学校ニ行く。此日河内氏より夜学校の報酬を渡さる。余か最初のレーボア〔が〕のレワード〔労働〕なりと思へは、何によりも有難し〔は〕」³⁵⁾と、初めてのアルバイト報酬であったと川嶋は日記に記した。受け取った金額は1円50銭であった。1903～04年に川嶋一郎が日記に記録した報酬は表15のとおりである。授業の増減により差はあるが、ほぼ月額2円の報酬が支払われている。先輩の岩波六郎（19期生）は1日1時間受け持ちで月額3円を受け取ったと回想しており³⁶⁾、教師への報酬は遠友夜学校の経済状況によって変動していたと推察できる。

受け取った報酬について、川嶋一郎は、実家から学資の仕送りを受けていたこともあり、

書籍購入費にあてた。その一方で、遠友夜学校教師の中には自身の学資に苦勞している者も少なくなかった。1904年5月15日、荒川重理より教師を依頼された石塚賢治は、先輩の足助素一³⁷⁾が石塚を「彼れが^s(遠友夜学校教師を)承諾だにせば、かくせば、学資には多少の困難を嘗めぬ事と思う」³⁸⁾と心配した経済状況にあった。翌日、石塚は「大ニ喜ビタル模様」³⁹⁾で教師を引き受けており、遠友夜学校教師への報酬は、札幌農学校の学生自身への学資支援となることもあった。

表15 遠友夜学校教師報酬金額
(1903～04年)

入金日	金額
1903.1.31	1 円50銭
1903.2.27	2 円
1903.4.1	2 円
1903.6.3	2 円
1903.6.5	2 円
1903.9.30	2 円50銭
1903.10.10	1 円30銭
1903.11.15	1 円50銭
1903.11.25	50銭
1904.4.5	2 円

備考 川嶋一郎「当用日記」(1903年、1904年) 巻末の金銭出納簿より作成。

2-2. 倫古龍会と堇会

川嶋一郎は、「当用日記」に、遠友夜学校の各種行事の準備・実施や出来事を綴った。例えば、春・夏の行事には遠足があり、藻岩山登山、茨戸・真駒内、すすらん狩り(厚別～月寒方面)等、札幌市街や近隣に出掛けている。冬の行事には、卒業式(12月末)、卒業式後に盛大に行なっていた奨励会(福引、演芸・遊戯)があった。どの行事も、川嶋一郎ら教師たちが率先して準備・運営している。また、出来事としては、教師だった札幌農学校卒業生が来札・帰札・離札に際して来校することもあり、有島武郎(1903年6月29日来校・講話)、半澤洵(1903年3月30日北里研究所より帰札)、蠣崎知二郎(1903年3月15日渡台・離札のため送別)等の来校を川嶋は日記に書き留めている。

さらに、川嶋一郎は、生徒達の修養(倫古龍会、堇会)の活動も日記に記した。倫古龍会は、1897年創設の男子生徒(5年生以上)の修養会であり、創設当初は毎月1回日曜日にリンカーンに関する講話・伝記輪読等を行なっていた⁴⁰⁾。1903～04年の同会の開催の様子を、川嶋一郎や足助素一は表16のように伝えている⁴¹⁾。

この時期、倫古龍会は、毎月1～2回程度、日曜日に開催されている。教師や元教師(大島金太郎、瀧臣弼)が演説を行ない、その後、生徒たちによる討論があり、参会者全員による余興・遊戯が行われていたことがわかる。演説題目は教師が自身の関心に基づき、自

由に設定している。1903～04年にかけては、雄弁な足助素一の登壇が目立っており、足助は日露戦争最中にトルストイの非戦論に基づいて演説していた。

一方、董会は、1900年、女子の労働従事を卑しむ風潮を改めるため、労働を重んじ自助の精神を養うことを目的として創設された女子生徒の修養会である。毎月1回日曜日の夜会合し、教師による訓話や生徒の修養談のほか、紙袋貼りや雑巾縫いの手芸作業（労働）を行なって、その労働の対価として得た収入を遠友夜学校積立金にあてる活動をした⁴²⁾。

表16 倫古龍会開催内容（1903～04年）

日付	会合内容
1903年 1月25日	演説（足助素一、河内完治）、「処世の歌」稽古
2月1日	討論（農と工と孰れか拡張すべきか）
2月15日	演説（3～4氏）、親睦会
3月1日	討論（新聞を聞むの可否論）
4月19日	演説（足助素一、池田競）
5月10日	* 倫古龍会開催
5月17日	* 倫古龍会開催
6月7日	演説（大島金太郎「欧米風俗について」）、各種遊戯
11月15日	演説（大島金太郎、瀧臣弼）、各種遊戯
12月6日	高等科演説（河内完治、足助素一、竹田茂）、尋常科演説（末光績）
1904年 2月21日	演説（末光績「Popular story of the Legend.」）、討論（牛馬優劣）、怪談
3月6日	演説（足助素一「戦争中ノ覚悟」・「倫古龍会ノ盛衰」、河内完治「失敗ニ処スルノ道」）、談話（以心伝心、催眠術等）
3月27日	演説（池田競）、討論
5月8日	演説（足助素一「吾人ノ戦争」、末光績「蟻ノ習性」）、詩論
6月5日	演説（上田源松「我ガ思想ノ変転」、北澤小八郎「戦争及後方勤務ニ対スル国民ノ覚悟」）
7月10日	* 倫古龍会開催
7月24日	演説（足助素一「トルストイ前半生ノ伝記、精神的及表面的」）
8月14日	演説（足助素一「トルストイノ人生観」）、演説「苦楽」
8月21日	談話（足助素一「告別」）

備考 川嶋一郎「当用日記」（1903年）、足助素一「（明治三十七年）日記」（前掲『足助素一集』189～338頁）より作成。*は開催日は確定したが、内容が不明な会。

川嶋一郎は、1904年3月6日、董会より回章があり入会を求めてきたため承諾し、董会に入会した。親友の足助素一と同日の入会であった。川嶋は同日の第1回例会には出席せず、1904～05年にかけて4回（1904年は5月1日、5月29日、1905年は5月7日、6月4日）⁴³⁾しか出席していないが、日記には、「夜はスマレ会ありしに就き夜学校に行きて袋張りなす。例の口悪る連のより合なれば騒々しきこと限りなし」（5月1日の条）、「七時

より夜学校の手嶋友記先生、熊本女学校へ御出で二なる二付き、すみれ会を兼ねて送別会を開く。袋はり終りて、遊戯、唱歌などなし、帰路に就きしは十一時頃なりし」(5月29日の条)と記し、賑やかな董会の様子を伝えている。川嶋一郎は、後年、董会について「大体三十人位出席して、一夜に紙袋を二千枚前後張る等仲々愉快でした」と池田次郎とともに回想している⁴⁴⁾。

3. ロシア文学への傾倒

3-1. ロシア文学受容の素地——キリスト教との接触——

川嶋一郎とキリスト教との出会いはロシアとの出会いでもあり、父の川嶋泰作によって与えられたものであった。川嶋泰作(1856-1930)は清酒醸造店を経営すると共に、店舗内に開設した福岡郵便局で初代局長を務めるなど、福岡町の名士のひとりであった。その一方で、川嶋泰作は、1875年親類の下斗米連次郎一家3人と共にロシア正教会の布教が進んでいた三戸で受洗しており、ロシア正教会の執事として福岡町での信仰・布教活動を支えていた⁴⁵⁾。川嶋泰作は自身の迫害経験等もあり自分の子女には洗礼を強要しなかった。しかし、川嶋一郎は幼少時より毎朝夕祈捧を捧げる父親の姿を見て、伝教師⁴⁶⁾による説教を聴き⁴⁷⁾、川嶋家にはクロンシュタットの聖イオアン(Ioann of Kronstadt)の写真(1880年代撮影)があるなど⁴⁸⁾、自然とロシア正教会の諸事にふれる環境にあった。

その後も、川嶋一郎は、東京での中学生時代、精神修養の必要を感じて、内村鑑三(1861-1930)と松村介石(1859-1939)の著書を愛読しており、キリスト教宗教家の論説に感銘を受けている。内村鑑三は札幌農学校2期生で、一方の松村介石は松村松年(札幌農学校教授、13期生)の実兄であり、札幌農学校とは関係が深い宗教家であった。川嶋一郎は、「中学を卒業して札幌に来ることになったが、此の時ノ考へは東京などに居るよりハ精神修養の爲めにも良かるべく且つ学問も得たひが精神上の収容をも得たひといふのを私か札幌に来るときの大目的でありました」(1903年12月28日条の補遺)といい、川嶋一郎は精神修養の地として内村鑑三が青年期を過ごした札幌を選んでいった。

1900年6月渡道した川嶋一郎は、親類の下斗米貞五郎宅(札幌区南2条西7丁目)に寄寓した。下斗米貞五郎は正教会伝教師であり、下斗米宅に寄寓した川嶋は正教会会堂で日曜礼拝にも参列している⁴⁹⁾。その後、札幌農学校在学中にかけて、川嶋一郎は積極的にキリスト教関係者の集会、行事に参加した。1900年8月には札幌独立基督教会で開かれた内村鑑三主催講談会に、1901年秋からは伊藤清蔵(札幌農学校助教授、18期生)主宰の聖書研究会にも参加した。1904年1月からは同級生の藤井為次郎の勧めで米国人ウィーバーの聖書講義(毎週日曜日、札幌美以教会)にも参加した。加えて、札幌独立基督教会・札幌美以教会へ通う同級生についていくこともしばしばあり、親友の足助素一や先輩の石澤達夫(札幌美以教会員)等との宗教談義も好んでしていた。川嶋一郎は最終的に受洗をしなかったが、在学中はキリスト教に関する思索を一層深めて、信仰問題に煩悶する学生生活

を送っていた。

3-2. ロシア文学の受容——『学燈』とトルストイ——

川嶋一郎がトルストイ（Lev N. Tolstoi, 1828-1910）の作品を読み始めたのは1902年秋、本科進級後からである⁵⁰。最初に入手したトルストイ作品は不明であるが、1903～1904年、川嶋一郎はトルストイ *Resurrection*.（『復活』の英訳書）をはじめとして、ゴーリキー、ツルゲネフなどのロシア文学書を数多く読んだ（表17）⁵¹。特に、川嶋一郎はキリスト教教義に対する煩悶の答えをトルストイ作品に求め、トルストイの宗教観に共鳴した。

表17 ロシア文学・評伝に関する読書一覧（1903～04年）

年	日付	書名等
1903年	1月9日	※東京遊学時代の友人 石黒春秋から郵送してもらったトルストイ著書を受領
	1月11日	徳富蘆花『トルストイ』（十二文豪第10巻、民友社、1897年4月26日初版） ※振進堂から購入、2/5読了
	1月17日	Tolstoi: Resurrection. (トルストイ『復活』の英訳)
	2月2日	インデペンデント紙掲載のトルストイ記事
	2月2日	Gorkii: Fomá Gordyéeff. (ゴーリキー『フォマ・ゴルデーエフ』の英訳)
	2月2日	ゴーリキー『チェルカッシュ』（英訳）。 ※既読
	2月20日	Tolstoi: On Life. (トルストイ『人生論』の英訳)
	3月3日	トルストイ著・加藤直士訳述『我懺悔』（警醒社、1902年10月3日初版） ※富貴堂から購入
	4月26日	M.A.Ward 著・住谷天来訳補『十九世紀之予言者』（警醒社、1903年4月4日初版） ※購入
	5月15日	トルストイ著・加藤直士訳『我宗教』（文明堂、1903年3月14日初版）
	10月22日	Tolstoi: Death of Ivan Illiwitch. (トルストイ『イバンイリウイチの死』の英訳)
	11月13日	Tolstoi: War and Peace. (トルストイ『戦争と平和』の英訳) ※教文館に郵便為替で発注
	11月19日	「Tolstoi ノ Plays」 ※丸善に郵便為替で発注
1904年	11月28日	Tolstoi: Master and Man. (トルストイ『主人と下男』の英訳) ※読了
	1月10日	Tolstoi: First Distiller. (トルストイ『ファースト・デスティラー』の英訳)
	2月23日	外報「予は如何なる社会主義者なる乎 紐育に於て 金子喜一」（『六合雑誌』第278号、1904年2月15日発行、69～73頁）。 *William Jennings Bryan (政治家、1860～1925) が、トルストイを訪問した際の模様。
	3月14日	姉崎正治「ロシヤの国情とトルストイ」『時代思潮』第2号（1904年3月5日発行、21～26頁）
	4月9日	マリ・バシキルツェフ Marie Bashkirtseff (画家、1858～1884) の日記 ※既読
	4月10日	Tolstoi: Dominion of Darkness. (トルストイ『暗黒の勢力』の英訳)
	4月11日	ツルゲネフ『烟』 ※丸善に郵便為替で発注。4/18ツルゲネフ著作2冊を受領、4/25から読み始める。
	5月4日	笹川臨風「露邦の画伯ヴェレスチャギンの死」（1904年5月1日付『読売新聞』）
	6月5日	Tolstoi: Tales from Tolstoi. (トルストイ『小話集』の英訳)
	9月19日	平民社訳『トルストイの日露戦争論』（文明社・信陽社、1904年9月12日初版）
	9月25日	Tolstoi: Sevastopol. (トルストイ『セバストポリ』の英訳)

備考 川嶋一郎「当用日記」（1903年、1904年）より作成。※は川嶋一郎の動向、*は記事内容の補足。（ ）には、出版社・発行年（版を重ねたものは初版発行年）や訳書等を補記した。

日課のように読書をしていた川嶋一郎は、札幌区内の図書館（札幌農学校図書館、北海道教育会附属図書館⁵²⁾）にも頻繁に通い、書物の購入は札幌区内随一の書籍商である富貴堂⁵³⁾だけではあきたらず、郵便為替を組んで東京の書籍商の丸善や教文館などから取り寄せることもしばしばであった。

日本においてトルストイは、徳富蘆花『トルストイ』（十二文豪第10巻、民友社、1897年）によってトルストイの人物・作品評が広く紹介され、加藤直士による邦訳書（『我懺悔』、『我宗教』、『トルストイの人生観』、『トルストイの白露戦争観』）が1902年秋～1904年夏にかけて相次いで出版されて人気を博したが⁵⁴⁾、川嶋一郎が札幌農学校在学時には、『戦争と平和』等の主要な作品は未邦訳・未刊行のままであった⁵⁵⁾。

川嶋一郎は、「トルストイの著書は片っ端から丸善の『学燈』を見ては買い込んだ。まだ邦訳書のでない頃で、英訳書計りであった」⁵⁶⁾と回想している。

『学燈』（丸善発行、月刊誌）は札幌農学校の教官・学生等にとっても貴重な洋書情報源であり、札幌農学校図書館に配架されていた⁵⁷⁾。内田魯庵の卓見・編集のもとロシア文学の紹介に力を入れていた⁵⁸⁾『学燈』は、特に、第57号（1902年2月）から盛んにトルストイ作品の書評・英訳書入荷情報が載っており、トルストイ *Resurrection* もその一書であった。

その一方で、川嶋一郎は、雑誌類では、キリスト教系の『聖書之研究』（内村鑑三編著）や『六合雑誌』（日本ゆにてりあん弘道会）のほか、『太陽』（博文館）や『時代思潮』（時代思潮社）といった総合雑誌を愛読し、図書類では姉崎正治・徳富蘆花等を好んで読んだ（表18）。

表18 ロシア文学以外の愛読書（1903～04年）

坪内雄蔵『文学叢書 英文学史』（東京専門学校出版部、1901年6月2日初版） 坪内雄蔵『英詩文評釈』（文学叢書第5編、東京専門学校出版部、1902年6月4日初版）
『沙翁物語』『ダンテ神曲物語』『旧約バイブル物語』など、富山房発行の通俗世界文学全集(1903年初版)
徳富蘆花『不如帰』（民友社、1900年1月15日初版） 徳富蘆花『黒潮 第一篇』（黒潮社、1903年2月27日初版） Allen Upward 著・徳富蘆花（健次郎）訳述『外交奇譚』（民友社、1898年10月13日初版） 徳富蘆花『青山白雲』（民友社、1898年3月25日初版） 徳富健次郎（蘆花）『思出の記』（民友社、1901年5月15日初版）
海老名弾正『耶蘇基督伝』（警醒社、1903年1月24日初版） 海老名弾正『基督教本義』（日高有隣堂、1903年12月29日初版）
黒岩周六『天人論』（朝報社、1903年5月14日初版）
木下尚江『火の柱』（平民社、1904年5月10日初版）
姉崎正治『復活の曙光』（有朋館、1904年1月1日初版）

備考 川嶋一郎「当用日記」（1903年、1904年）より作成。いずれの図書も版を重ねており、初版発行年を（ ）内に記した。

特に、川嶋が定期購読していた『時代思潮』⁵⁹⁾では、姉崎正治「ロシアの国情とトルス

トイ」（第2号、1904.3）、横井時雄「トルストイ翁の手簡」（第4号、1904.5）、「トルストイの大警告」（第8号、1904.9）、「トルストイの戦争論」（同）、「トルストイ伯と民衆」（第11号、1904.12）、「非戦論とは何の意ぞ」（同）など、主筆の姉崎正治（東京帝国大学文科大学教授、宗教学）を中心にトルストイを喧伝しており、川嶋一郎はそれらの論説に共鳴している。また、1903年1月12日から読み始めた徳富蘆花『トルストイ』については、「私のトルストイ崇拜はその根源は徳富蘆花の『トルストイ』傳によって培養された」⁶⁰⁾と回想するほど読み込んでおり、川嶋一郎はトルストイ作品を読むだけでなく、姉崎正治・徳富蘆花等による論説・評伝類を熟読することによって、作品への造詣を深めていったといえる。

3-3. ロシア文学の影響——日露戦争と非戦論——

1903年秋、日露関係が緊迫し、新聞は「露探」⁶¹⁾の嫌疑・検挙情報が飛び交い、ロシアを敵視した報道が過熱し始めた⁶²⁾。その一方で、同年9月、内村鑑三は『聖書之研究』において、非戦論を主張して世論に挑戦した。10月20日内村の後輩にあたる札幌農学校生たちも学内で日露関係を論じており、川嶋一郎は「夜は遊戯の後ち日露戦争の可否論となり盛の議論なりしか、余は恐露病者と做されたり」（1903年10月20日の条）と書き留めている。「トルストイに心酔して（略）無抵抗主義、平和主義に対しても教えられるところが多かった」⁶³⁾のである。川嶋一郎は、ロシアには正教会を通して親密さを、トルストイに対しては作品を通して尊敬の念と憧れを抱いていた。

しかし、1904年2月、日露関係は一触即発の事態に陥った。2月6日動員令により同級生の渡邊環ら数名の学生が召集され、川嶋一郎の周囲も急に慌ただしくなった。号外の鈴の音、停車場・料理屋からの万歳の声を聴き、「戦争も弥々迫まりし模様なり。日本国民は大和魂とやらをふり起して狂するなるべけれと、剣を以て立つものは剣を以て亡ぶ人の子の教を信ずるものは同情の念を起す能はず。噫、吾れ之の人々の間二立ちて如何なる行動をとらんか、余は真ニ盲目たるなり」（1904年2月8日の条）と川嶋は日露開戦の危機を悲嘆した。

1904年2月10日、遂に、日露は戦端を開いた。札幌農学校にあっては、2月12日学生生徒から海軍戦勝記念提灯行列の願出があったほか⁶⁴⁾、2月18日農業経済学講堂において宣戦詔勅奉読式を挙行するなど、好戦的な雰囲気作り上げられていった。日本国内では、ロシア正教会を敵視した迫害が横行し⁶⁵⁾、川嶋一郎は「我が崇敬するニコライ師」を案じ（1904年2月11日の条）、ロシア正教会信者の境遇に同情した（1904年2月16日の条）。その後も、川嶋は、「宣戦詔勅は決して喜ぶべきことに非らず。世界平和の為め、人道の為め、悲しむべきことなりとせば、戦勝豈にべん舞して欣ぶべき事ならんや」（1904年2月13日の条）と平和を祈り、平和論の立場から黙想を続けて日記に綴った。

1904年2月26日付『北鳴新報』は、札幌農学校嘱託の飯田雄太郎（予修科・土木工学科画学講師嘱託）が警察の取調を受けていると報じたという⁶⁶⁾。嫌疑は不明だが、川嶋一郎

は「不敬とか、不忠事件とかの記事あり。時節柄愛国者の御機嫌ニさわりしものなるべけれど、直ニ被らすに露様の名を以てし警察も聞捨ならずと取調中とは憤飯の至りなり」(1904年2月28日の条)と憤り、足助素一が「主張セル非戦論デ言禍ヲ買ハントシテ居ラル、非戦論ハ正当デアルガ同氏ノ行動ハ余リニ奇ニ走り余リニ突飛ニ又不謹慎ヲ極メテ居ル」(1904年2月26日の条)と各自の日記で記していることから、飯田雄太郎が非戦論の立場で何らかの行動を起こしたものと考えられる。札幌農学校は、2月29日付けで飯田雄太郎の講師嘱託を解いた⁶⁷⁾。解嘱を川嶋一郎が知ったのは3月3日、川嶋は同じく平和論者であった親友の足助素一と「時局問題ニ就て大激論」をなし、札幌農学校幹部(佐藤昌介校長；札幌美以教会員、宮部金吾教務部長；札幌独立基督教会員)を「曲学阿世の徒よ、吾れは曾て汝を思慮ある基督教徒、品性ある紳士と思ひたりき。然るに何事ぞ世界人道の大義をとりて平和博愛をとなうる之の弱き一義人をなやむる。自ら基督教徒と称する以上は如何ニ曲解するも国家の無上権を信ずるとハ能^{〔はざ〕}ばさるべし。然るに世ニあり自己の地位を安全ならしめん^{〔が〕}か^{〔が〕}ために其の人の説るを信理と知りながら力弱きに乘して直ニ其の職を免し得たりとなして愛国者を気取る。嗚呼、汝の道義心とは期^{〔期〕}の如きものか。時代精神とは世ニありて俗流と供に声を等して真理を無視するの謂ひか」と痛烈に批判した⁶⁸⁾。激論は翌日も続いた。足助素一が「民皆な戦争熱ニ狂せるときなれば沈黙を守りて寧ろ平和に復して平静ニ判断を下し得る時期を待つて平和論をとなうるを良し」とする一方で、川嶋一郎は「余は然らず反て堂々平和論を懐けるものは此の際ニ大声叱呼して民心ニうつたしるを良し」と譲らなかった。

二人の平和論に対する想いはむなしく、日露戦争は次第に激化していった。札幌農学校からも入営・出征者が相次いだ。その度に、同級生たちは写真館での記念撮影、壮行会、札幌停車場での送別を行なった⁶⁹⁾。その後、本科3年級に進級した川嶋一郎は、農学乙科を専攻して演習・実験・卒業論文の準備に追われる日々を送り、非戦論を唱える姿を「日記」に綴ることはなかった。しかし、日露戦争開戦日(2月11日)に描き終えたトルストイの肖像画を自室に掲げたり、出征兵を停車場で歓送することはなかった。日露戦争中にはトルストイ『戦争と平和』、木下尚江『火の柱』、『平民新聞』を取り寄せて耽読した。「私は無論、そのときは平和主義者と目されてゐたし、自分でも戦争には反対であった」⁷⁰⁾と川嶋一郎は回想する。川嶋一郎の非戦論の立場からのささやかな抵抗であった。

1906年5月3日午前10時、札幌農学校では図書館において「戦死病歿者追悼会」を挙行了した。日露戦争における札幌農学校卒業生・学生生徒の出征者は79名を数え⁷¹⁾、負傷者7名、戦死者12名、病歿者2名を出した。在学中のまま出征した学生生徒は8名、そのうち戦死者は半数の4名にのぼった。その中には川嶋一郎の同級生渡邊環もいた⁷²⁾。

むすび

20世紀初頭、札幌農学校では、予修科入学者募集に全国各地の中学校から受験生が集まっ

た。彼等は本科に進学後、1～2年級で農学全般の基礎知識を修得し、3～4年級にかけて各自の専攻分野の学識を磨いた。学業時間以外では、遠友夜学校での教師活動や読書を通じて、交友を深めるとともに、社会を見る目を鍛えていた。

川嶋一郎も、学業生活にあつては、橋本左五郎教授から、ドイツでの最新の先行研究をもとに畜産学・酪農論全般を修得した。酪農業の推進・改善の立場から畜産学が重点化されたカリキュラムにおいて、ドイツ留学した橋本教授が、乳汁・乳製品の分析に定量分析と顕微鏡を用いた科学的手法をとって指導にあたり、農学乙科専攻の学生と共に乳汁・乳製品の品質改良に努めた最初期であった。それは、川嶋一郎ら学生にとっては専門知識の修得であるとともに、畜産技術者としての自負を抱かせ、卒後進路へと活かされた。先輩の米山豊、湯地定武は共に農商務省実業練習生として渡米・渡加して研鑽を積み、同級の柳川鑑蔵は母校嘱託、江刺家昂は北海道庁技手として、いずれも畜産に携わった⁷³⁾。川嶋一郎も、1906年11月、創設間もない農商務省月寒種牛牧場⁷⁴⁾の技手に就き、初代場長の岩波六郎のもとで畜牛係として牛の輸送監督・飼養管理を担当した。北海道庁技手(第三部⁷⁵⁾畜産課)から転・昇任した岩波六郎場長は19期生、川嶋にとっては橋本左五郎門下の大先輩でもあった。岩波六郎場長にとって川嶋は、輸入種牛の選定で海外出張中に場長代理を任せるなど、頼りにできる後輩となった。

また、日常の学生生活にあつて、川嶋一郎は、ロシア文学、とりわけトルストイ作品を愛読して感化を受け、宗教的・思想的な思索に耽った。『学燈』で洋書入荷情報を得ては丸善や教文館に為替を組み、未邦訳のトルストイ作品を英訳書で購入するほど川嶋は熱中した。学資仕送金が15～22円にもかかわらず、英訳書購入費に5円30銭～6円70銭も費やすほどであった。日露戦争に際しては、絶対的平和論を唱えるトルストイに賛同し、非戦・平和論の立場を貫き、同じくトルストイ作品を愛読していた親友の足助素一と議論を重ねることにより、相互に思索を深めていった。さらに、遠友夜学校の教師活動を通じて、貧窮な家庭の生徒達に接し、貧困・幸福・人生等のテーマをさらに深く思索することとなった。札幌農学校は、農業経済学者として殖民論を唱える佐藤昌介校長の講義「経済原論」を受けて「氏は甚だしき国家主義者なり」(1904年3月11日の条)との批判視点をもつ学生を生み出すに至った。

〔注〕

- 1) このほかに高岡熊雄(13期生)の日記3点を確認しているが、未翻刻・未刊行である。
- 2) 『北大法学論集』第39巻第5・6合併号下巻、1989年10月、1899～1918頁。
- 3) 後述するように、札幌農学校は1898年予修科(本科進学前の予備階梯、修業年限2年)を設置し、全国から尋常中学校卒業者が集まり、狭き門となっていた。入学者には東京遊学経験者も多く、最新の教養を知った青年達でもあった。川嶋一郎も、早稲田中学校では坪内逍遙に、私立中学郁文館では土井晩翠などに習っており、東京遊学時代の友人(小島正治等)とも頻繁に文通している。その意味では、「北海道という遠隔地」の学生としては、単に括りきれない人物であると考えられる。
- 4) 山本美穂子翻刻・川嶋昭二補訂『〈翻刻〉札幌農学校第23期生川嶋一郎日記(1899～1904年)』北海

道大学大学文書館資料叢書3、2009年6月。

- 5) 『郁文館五十年史』(1939年)。仙台学院の前身は東京数学院長上野清が1894年9月設立した同院宮城分院(『校史1872-1992 東京高等学校創立百二十周年記念誌』1992年、45～47頁)。本稿における川嶋一郎による回想は、川嶋一郎「偲草 後篇」(直筆ノート、1955～66年、個人蔵)、川嶋一郎『七十七年の回顧』(私家版、1956年)、川嶋一郎著・川嶋昭二編『吾が半生の思い出』(私家版、1992年)を参照した。
- 6) 「全国汽車発着時刻及乗車賃金表」(『官報』附録)。
- 7) 第二高等学校「生徒名簿^{皇明三十二年九月}」(東北大学史料館蔵)、二戸市立二戸歴史民俗資料館編『壮麗にて驚くこと沢山のあり候 川嶋明八が絵はがきで伝える100年前のヨーロッパ』(二戸市教育委員会、2008年、100頁)。
- 8) 前掲『吾が半生の思い出』50頁。
- 9) 『北大百年史 通説』1982年、128～131頁。
- 10) 札幌農学校簿書692「収受発送簿 明治三十三年自五月十日」、同729-3「予修科入学願書 明治三十三年七月」、同716「日誌 明治三十三年四月」(いずれも北海道大学大学文書館蔵、以下所蔵は略す)。1900年5月2日付『官報』、『文部省年報』を参照。
- 11) 1895年1月22日、文部省では札幌農学校が提出した予算案の海外留学生経費について削減意向のため、留学生は文部省在学留学生として上申するよう鈴木書記官より佐藤昌介校長宛てに電報があった。佐藤校長は、橋本左五郎を「農学専修」のためと推薦したが、文部省の木下専門学務局長から「農学専修トアレド其内重モニ研究セシムベキ専門ノ学科アリト信ス之ヲ明瞭ニセサレバ詮議シ兼ヌル」との意向があり(2月8日)、「牧畜及畜産製造学」「果樹害虫駆除法」を専修させると佐藤校長は回報した(4月11日)。しかし、翌日には「牧畜及畜産製造学」以外は見合わせるとした。「牧畜及畜産製造学」「果樹害虫駆除法」を南教授と分担していた橋本左五郎は、留学後は「畜产学」専属となった。一方、「果樹害虫駆除法」を扱う昆虫学担当には、1895年7月卒業予定の松村松年(13期生)を佐藤校長は配置した(札幌農学校簿書506「親展書類 明治二十八年分永久」)。
- 12) 1895年5月9日付『官報』。
- 13) アメリカ人教師ブルックス W.P.Brooks (1877.1～1888.10)、ブリガム A.A.Brigham (1888.12～1893.11) は科目「Agriculture (農学)」中で「Stock Farming」(牧畜)を教えたが、ブリガム離任直後の学期(1894年1月～)からは、①家畜の品種・蕃殖・管理を扱う「牧畜論」(農学分野)、②家畜栄養を扱う「動物飼養論」(化学分野)と2科目に分かれた。①を担当したのが、ブルックスの教えを受けた南鷹次郎教授(2期生)である。なお、南鷹次郎講義「牧畜論」の受講ノートには、高岡熊雄(13期生)、平塚直治(14期生)、藤田昌(15期生)、湯地定彦(16期生)、西田藤次(17期生)がある。藤田昌の受講ノートからは、南教授が、参考文献に①マイルス『牧畜論』(Manly Miles, *Stock-breeding*)、②ウォーフィールド『畜牛繁殖の理論と実践』(William Warfield, *The Theory and Practice of Cattle-breeding*)を掲げてアメリカの文献を用い、アメリカの農科大学(Wisconsin や Pennsylvania)等の先行研究や統計を採用していたことがわかる。
- 14) 吉田豊『牛乳と日本人[新版]』(新宿書房、2000年)、『大日本牛乳史』(牛乳新聞社、1934年)、木村勝太郎『北海道酪農百年史』(樹村房、1985年)等を参照。
- 15) ①札幌農学校簿書807「修学旅行報告書綴」では、1904年6月、橋本教授引率のもと、前田農場(搾乳所、小樽区)における生乳殺菌法・搾乳経営法を見学しており、同農場監督竹内静勝は、橋本教授に、生乳殺菌法改良の指導について感謝を述べている。②札幌農学校簿書994「庶務ニ関スル書類 明治三十七年」では、1904年2月16日付、前田農場から札幌農学校宛ての瓶装殺菌牛乳の「御試験願」が綴られており、③『北海道畜産協会報』第2号(1904年2月、42～44頁)に、橋本教授による前田農場の殺菌乳証明書が転載されている。

- 16) 「札幌農学校臨時部歳出予算調書 第二按」には、「農芸化学科」「畜産学科」の本科への増設があげられ、畜産学科のために、図書機械及標本設備費6千円、器具設備費3千円が計上されている(1902年1月20日付「明治三十六年度以降臨時部予算調書送付の件」、『北大百年史 札幌農学校史料(二)』555～564頁所載)。
- 17) 札幌農学校は1894年「実科演習仮規程」により、本科3、4年級の課程に、①農業経済学、②植物病理学、③農芸化学の3実科演習と農業実習(④甲組：農芸、⑤乙組：牧畜)を設け、学生は①～⑤から1つを専修して演習・実習方式の専攻研究を行なうことが可能となっていた。1896年9月校則改正により仮規程は「実科規程」となり、①～③のほかに、新たに3実科(農学甲科、農学乙科、農用動物学)が設けられた。これら6実科は、1907年東北帝国大学農科大学昇格時に講座開設の土台となった。1907年設置の講座は、農学科第一部(農学科)、農学科第二部(農業経済学科)、農学科第三部(農業生物学科)、農芸化学科、畜産学科(第一部・第二部)である。
- 18) 川嶋一郎の回想では「(実科演習の専攻は)私は石沢氏の感化もあったろう。又橋本先生の人格に私淑した点もあったろう、畜産を専攻したい念願であった」という(前掲『吾が半生の思い出』71頁)。また、川嶋は、ベストセラーであった徳富健次郎(蘆花)『思出の記』(民友社、1901年5月15日初版)を本科2年級の1903年12月22日から読んでいる。同書には札幌農学校も登場した(和氣和民氏よりご教示いただいた)。
- ①主人公が伯父から札幌農学校進学を勧められる、②札幌農学校へは主人公の親友(野田清磨)が進学・卒業し、故郷大分県で牧畜業を成功させている、③野田の牧場では牛酪(バター)、コンデンスミルク、チーズを製造していることが描かれており、川嶋の進路と比べると興味深い。なお、同書は刊行前には「おもひ出の記」として『国民新聞』1900年9月23日～1901年3月21日に連載されており、札幌農学校学藝会『札幌農学校』(1898年)の普及と共に札幌農学校の喧伝に役立ったと考えられる。また、徳富蘆花には母方の遠戚として、1897年札幌農学校予科を卒業した竹崎八十雄(後に、札幌独立基督教会牧師)がいたことも同時代的に交差して興味深い。
- 19) 当時は、野草、干草、粕などの飼料から発酵飼料への移行がされていない中での研究だった。
- 20) 石澤達夫のほか、長嶺林三郎(18期生)、岩波六郎(19期生)ら橋本門下も『会報』論説を占めた。
- 21) 『北海道畜産界の恩人 石澤達夫業績顕彰録』(1944年)を参照。
- 22) 農友会(札幌農学校農芸伝習科・農芸科の同窓会)。榎鍛は獣医蹄鉄工(1889年札幌農学校農芸科卒業)。
- 23) 上川郡鷹栖村字近文・美瑛村字邊別太に所在、牧場主は小林直三郎。飼養牛数は57頭、上川郡では藤野農場に次ぐ牛飼養の牧場であった(『第拾八回北海道庁勸業年報(明治三十七年)』146～147頁)。川嶋一郎が実習したのは近文所在の旭牧場支場。
- 24) 上川郡鷹栖村近文、美瑛村字美瑛原野に所在、牧場主は藤野四郎兵衛。牛の蕃殖、牛馬放牧受託のほか、搾乳・牛乳販売、肉牛販売を行っていた。旭川第七師団は重要な取引先であった。『北海旭新聞』広告主としても目出っており、上川郡で最大規模を誇る牧場であった。
- 25) 根室郡根室町大字根室村に所在、飼養牛数183頭、根室郡随一の牧場(前掲『第拾八回北海道庁勸業年報(明治三十七年)』154頁)。
- 26) 札幌農学校簿書814「修学旅行報告書綴」
- 27) 札幌農学校簿書672「明治三十二年 夏期修学旅行報告 農学乙」。18期生で農学乙科専攻学生(長嶺・渡部・河田・廣瀬・伊東・中村・百瀬)の旅行報文が綴られている。報文内容は、日高各地牧場(新冠御料牧場など)を中心に、東北・九州・関西地方の牧畜事業の見学から、牧場経営状況を報告したものが多く。
- 28) 札幌農学校生の受講ノートにおいて、「酪農論」は川嶋一郎のものしか現存が確認されていない。川嶋は、①畜産学、家畜生理学・衛生学とは別に「酪農論」を製本している、②同級生の逢坂信吾(農業経済学専攻)の受講ノートには「酪農論」がないことから、「酪農論」は農学乙科演習として橋本

教授が口述したものと推測される。なお、「酪農論」は農科大学昇格後には農学科の必修科目となった。東北帝国大学農科大学生中島九郎の受講ノート「家畜生理論 家畜衛生論 酪農論」(1909~10年受講、製本)は、参考文献・構成・内容が川嶋ノートとほぼ同一であり、橋本左五郎教授のさらに詳しい教育内容を知り得るものである。

- 29) 柳川鑑蔵も「脱脂乳の利用法」から後に題目を変更した(『文武会雑誌』第46号、1905年9月、10頁)。
- 30) 前掲『吾が半生の思い出』78~79頁。
- 31) 財団法人札幌遠友夜学校『事業一覧』1936年、1~3頁。
- 32) 札幌遠友夜学校創立百年記念事業会編『思い出の遠友夜学校』北海道新聞社、2006年、246頁。
- 33) 前掲『事業一覧』3頁。
- 34) 「当用日記」1903年11月27日の条。
- 35) ルビは引用者による補注。以下、日記引用の際のルビは補注。
- 36) 岩波六郎「遠友夜学校の回顧」(『遠友夜学校』札幌市教育委員会文化資料室、さっぽろ文庫18、1981年、199頁)。
- 37) 足助素一(1878~1930、1904年7月森林科卒業、後に出版社「叢文閣」を創業)。
- 38) 足助素一「(明治三十七年)日記」1904年5月15日の条(『足助素一集』足助たつ発行、1931年、246頁)。()内は引用者による補注。
- 39) 同上書、247頁。
- 40) 前掲『事業一覧』15頁。
- 41) 倫古龍会創設期の活動内容については、「豊水文庫 第壹号 明治三十一年九月十四日発兌」(墨書き・和装綴じ、中谷誠一氏所蔵。複製を大学文書館で所蔵)に詳しい。「豊水文庫」は倫古龍会が創設1年目にして初めて作成した手書きの機関誌で、その内容は同会の沿革・現況、同会の生徒たちの寄稿作文である。次号以降は現存が確認できていないが、『倫古龍会雑誌』(1911年発刊)以前の機関誌は沿革史でも指摘されておらず、「豊水文庫 第壹号」は貴重な一次資料である。
- 42) 前掲『事業一覧』16頁。
- 43) 「董会雑録 第一巻 編輯経緯」(前掲『札幌遠友夜学校資料集』所載)も参照した。
- 44) 「遠友五十年の足跡」『札幌遠友夜学校報 五十周年記念号』第31号(1943年6月18日付、3頁)。
- 45) ニコライ主教が1881年6月15日福岡町を来訪した際、川嶋泰作(ニコライ川嶋)が執事のひとりとして福岡町での正教会活動を支えていたことがニコライの日記に記されている(中村健之介監修『宣教師ニコライの全日記』第2巻、教文館、2007年、56~57頁)。
- 46) ペトル高橋(高橋俊、八戸出身)。
- 47) 前掲『吾が半生の思い出』14~15頁。
- 48) 聖イオアンの写真台紙には「露國司祭伊望」と書き込みがある。同写真は、小田伝教師の写真と共に、川嶋家所蔵アルバムに収められている。
- 49) 前掲『吾が半生の思い出』52~53頁。
- 50) 「当用日記」1903年12月28日条の補遺。
- 51) 親友の足助素一も、同時期に、*Master and Man.* (『主人と下男』の英訳)や『我宗教』、エチアンス・ペール著・上田駿一郎訳『トルストイ伯及其家庭』(同文館、1902年1月初版)など、川嶋と同様のトルストイ作品を読んでいる(前掲『足助素一集』191~338頁)。また、川嶋は同級生の鈴木力治にゴーリキーとトルストイの小説集2冊を貸しており(1904.7.2)、足助は後輩の池田次郎からトルストイ1作品を借りている(1904.4.11)など、札幌農学校生の間でロシア文学書の貸し借りが行われていた。
- 52) 北海道教育会附属図書館(札幌区北1条西3丁目1番地、1899年10月設立)。閲覧料1銭を徴収し

た。

- 53) 富貴堂は札幌区南1条西3丁目にあった。
- 54) 1902年11月13日石川啄木（16歳）は東京芝の大橋図書館で『我懺悔』を読み、1903年3月武者小路実篤（18歳）は叔父宅で『我宗教』『我懺悔』を読むなど、当時の青年たちは加藤直士訳書に夢中になった（『石川啄木全集』第5巻（筑摩書房、1978年、19頁）、阿部軍平（『白樺派とトルストイ』彩流社、2008年）を参照）。
- 55) 『明治期翻訳文学総合年表』『明治翻訳文学全集』『新聞雑誌編』別巻1、大空社、2001年）を参照。
- 56) 前掲『吾が半生の思い出』64頁。
- 57) 蔵書印「札幌農学校図書之印」が押印された『学燈』は、北海道大学附属図書館に所蔵されている。札幌農学校簿書711「雑誌交附簿 明治三十三年」をみると、『学燈』は毎月納本されていたことがわかる。
- 58) 『丸善百年史』上巻（1980年、457～552頁；木村毅執筆）を参照。
- 59) 姉崎正治（嘲風）が博文館『太陽』に対抗する形で1904年2月発刊した雑誌。
- 60) 前掲『吾が半生の思い出』65頁。
- 61) 「露探」はロシアのまわし者という意味で用いられた。
- 62) 『読売新聞』を参照。「露探事件」として、樫藤震二（1903年10月27日付、11月11日付『読売新聞』）、岡田熊太郎（大阪府視学官。1903年11月21日付、12月12日付、12月24日付『読売新聞』）等の検挙・裁判が報道され、翌年1月からはさらに東京市内の「露探」嫌疑者名が次々と報道された。3月には秋山定輔（『二六新報』主筆・政治家、1868～1950）が、2月26日付『二六新報』の内閣弾劾問題を論じた社説で、「露探」疑惑をかけられ、衆議院議員辞職に追い込まれた。川嶋一郎も日記で秋山辞職記事に言及している。
- 63) 前掲「偲草 後篇」35頁。
- 64) 札幌農学校では学生生徒から市中行列の願出を受け、文部省に問い合わせた（2月12日付電報、校長名）。文部省からの返答は2月12日付では「粗暴ニ陥リ列国ノ感情ヲ害スル如キ事ハ嚴重ニ戒メラレタシ」と注意を促しつつも行列自体は禁じなかった。しかし、翌日付け電報で文部省は「市中行列ハ断然見合ワセラレタシ」と一転して行列を禁じた（「戦宣発布ニ付生徒取締方ノ件」、札幌農学校簿書804「明治三十七年札幌農学校公文録第一冊」）。川嶋ら本科2年級は、2月12日、本科1年級からの行列参列提案を受けたが、文部省訓令（2月10日付）により学校外運動は禁じられたことを理由に拒絶したという（2月12日の条）。
- 65) 中村健之介監修『宣教師ニコライの全日記』第8巻（教文館、2007年）にも、教会の強制引き払い、「露探」容疑での嫌がらせ・検挙など、正教会信者への敵視が各地で起こっていたことが記されている。
- 66) 北鳴新報社（札幌区通西4丁目1番地）発行新聞『北鳴新報』。1904年2月発行紙の現存が確認できていない。
- 67) 2月29日付け解嘱は事実であるが（百年史編纂資料；大学文書館蔵）、解嘱理由は明かではない。前掲の札幌農学校簿書804の索引には「十三、飯田講師解嘱ノ件 三枚 二月二十九日」と記載はあるが、文書自体が綴られていない。抜き出された飯田解嘱文書の行方は現在も確認できていない。嘱託講師の異動を伝えてきた『文芸会会報』が飯田解嘱については一切ふれていないことも違和感が残る。
- 68) 足助素一も、川嶋が飯田解嘱にかかわる校長や学校の処置を罵倒したことを日記に記している。足助自身も、「実ニ余モ余リニ学校ニ雅量ナク例令不謹慎ナルニセヨ此時ニ從テ主張ヲ枉ゲザル骨鯁ノ士ヲ追ヒ出シタル当局者ノ意気地ナシヲ惜シムモノデアル、抑モ基督教信者ト称スルS、Mノ輩ハ何

ヲ夢ミテ居ルノデアラウ、只教会ノ内デノミ又只平和ノ時ノクリスチヤンノミデハ何ノ役ニモ立タヌノデアル」(1904年3月3日の条)と、当局者として関わった佐藤校長(S)や宮部教授(M)の基督教信者としての態度を批判している(前掲『足助素一集』225頁)。

- 69) 前述の渡邊環が入営(第八師団)するにあたり、川嶋ら本科2年級は1904年6月8日壮行会(於偕楽園)を開いている。他に、田中義磨(予修科1年級)の壮行会が5月14日に、佐藤陽太郎(本科3年級)の壮行会が11月24日に、桂宗左(農芸科1年級)の壮行会が2月6日に開かれている(『文武会会報』第43号(1904年7月、23・26頁)、『同窓農友会々報』第36号(1904年8月、40頁)を参照)。
- 70) 前掲『吾が半生の思い出』80頁。
- 71) 出征者数の内訳は、本科卒業生13、本科在学生1、土木工学科卒業生6、土木工学科在学生1、森林科卒業生2、農芸科卒業生21、農芸科在学生5、兵学科別科卒業生30(「本校卒業生及在学生と戦役」『文武会会報』第44号、1905年1月、23～25頁)。
- 72) 在学生からの出征者は、†渡邊環(本科、1905.1.28没)、佐藤陽太郎(本科)、†飯田格郎(土木工学科、1905.3.6没)、†市村與三郎(農芸科、1905.10.12病没)、楠目豊之助(農芸科)、†増山成策(農芸科、1905.3負傷・7.10没)、桂宗佐(農芸科)、堀井信次郎(農芸科)であり、†は戦死病歿者(「本校出身戦死病歿者追悼会」『文武会雑誌』第49号、1906年10月、34～36頁)。
- 73) 『札幌同窓会第十六回報告』(1906年)、『札幌同窓会第十七回報告』(1907年)等を参照。
- 74) 1906年6月設置。1908年、緬羊の輸入・畜養も加わり月寒種畜牧場と改称。
- 75) 1905年殖民部から改組・改称。水産課・農務課・商工課・畜産課の4課からなった。1905～06年当時、高岡直吉部長(道庁事務官、3期生)のもと、畜産課長以外の3課長(和田健三：水産課長、伊吹鎗造：農務課長、安東義喬：商工課長)と、専門技術職である技師7名のうち6名は、札幌農学校卒業生が占めた(印刷局『職員録(乙)』1905・1906年を参照)。

(やまもと みほこ／北海道大学大学文書館員)